

2010年(平成22年)4月8日 木曜日

性同一性障害

「教えるべき」94%

心と体の性が一致しない性同一性障害(GID)の男児を埼玉県の公立小学校が女兒として受け入れるなど、学校の対応に関心が高まる中、GIDの治療に取り組む岡山大病院(岡山市)の中塚幹也教授が岡山県内の教諭約500人に行った意識調査の結果を、7日までにまとめた。9割以上が学校でGIDについて教えるべきと答えた一方、当事者に配慮した対応を取れると回答した教諭は少数だった。(民直弘)

GIDの児童、生徒の受け入れは昨年9月以降、埼玉県に続き鹿児島県の公立中学校で女子生徒が男子の制服で通学を認められた。2005年には兵庫県の小学校が男児を女兒として受け入れている。

調査は08、09年、小・中・高校教諭508人に実施。学校でGIDを教えるべきかを尋ねたところ、回答した459人のうち94%の434人が肯定的だった。教え

岡山大学教授 県内教諭調査

るべき時期(複数回答)について、小学校が最多で66%を占めた。当事者が中学生の場合を想定し、教諭の具体的な対応方法として「希望する性別の話し方を認める」としたのは約70%。ところが、希望する性別のトイレの使用▽望む性別の服装での登校―を認めるのは30%に満たなかった。

「多くの当事者にとって服装やトイレの問題は切実で、不登校や退学の一因になる。きめ細かな対応が必要」と中塚教授は指摘する。教育現場で性別に違和感を持つ子どもがいたかを問うと、479人のうち20%の96人が「自分の学」に「希望する性別の話し方を認める」と答えた。8%の38人が「担任にいた」と答えた。

中塚教授は「調査結果は、学校がいつ対応を求められてもおかしくない現状を示している。学校が組織的に当事者を支援できるよ

当事者への対応課題

GIDと学校 岡山大が2007年までに行った当事者への聞き取り調査では、大半が小学校時代に自分の性別に違和感を覚え、同大病院受診者の4人に1



人が不登校、5人に1人が自傷行為、自殺未遂を経験。第二次性徴や学生服の着用などが背景にあるとみられる。